

ある朝目覚めたら

深水由美子

私の日常が、ある朝とうとう壊れ始めた。定年間近の、もう若くない私であるから、できればこのまま、表向きだけでも平穏に暮らしていけたら、などと思っていた。それは愚かな考えだった。

空が揺れていた。

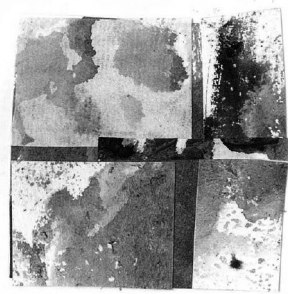
レースのカーテン越しに見える薄い雲の輪郭が、窓の縁に近づいたり離れたりにしている。ペランダに出てみると、積み木を隙間無く並べたみたいに立て込んだ住宅街の上に、薄曇りの冬の空が広がっていた。乾燥ハーブに使う底の紐が微かに揺れているが、風のせいではない感じだし、足下がふらつく気がするの、やはり揺れているのだ。地上では誰かが騒いでいるかもしれないけど、ここはマンション

の七階だから下を見るのは恐ろしい。私は高所恐怖症ぎみなのだ。

パジャマの襟を掻き合わせながら、隣やら上の階を窺っていたら、揺れはなくなつた。誰も騒いでいないようだし、やはり気のせいかと思つて再び布団に潜り込む。

暫くするとやはり揺れを感じた。不安が入道雲のように膨らみ始める。今に来るぞ、と思うと妄想が止められなくなつた。

エレベーターに閉じ込められた私はパニックだ。真っ暗である上に、天井がみしみしいっている。ガクンと大きな音がしてドアが大きく歪んだ。エレベーターの箱を吊しているワイヤーがぶちぶちと切れる音がする。地上に着いたら私はペしゃんこになっているかもしれない。非常階段か



ら逃げればよかった。でも見よ。人間がバラバラとパン屑みたいに振り落とされているではないか。何ということだ。ここは逃げ場がないのだ。マンシヨンに住むなんて迂闊だった、と思う。しかし今気付いてどうする。妄想でも本人は本当に恐ろしいのだ。なるべく無駄に苦しめないようにと思つて、頭を空っぽにして布団の中で丸くなつてやり過ごす。

暫くすると、また揺れは収まった。次に来るにしても、氣持ちに少し余裕が出てきた。正氣も戻つてきた。そういうえば家族がいたのだつた。

息子のワタルの部屋へ行き、床に散乱する障害物を避けながら「大丈夫？」と声を掛けるが、返事はない。布団を捲ると、汗と汚れた体臭がミックスされた饅^かえた匂いととも「何が」と不機嫌な声が返つてきた。

「揺れたの」

「だから、何が」

「マンシヨンがよ。地震よ。気付かなかつた？」

「揺れてねーよ。まだ早いじゃん」と私から荒々しく毛布を奪い取ると、また丸まつた。

ワタルはこの頃、一層肥大してきた。太り始めた頃は、熊のようで可愛い、などと思つていたが、最近は腹部が更に膨らんできたのでオットセイみたいになつた。あんな体

で横になるのは苦しいんじゃないかと思うけど、寝転んでテレビばかり見ている。床にありとあらゆるジャンルのVDが散らばつていて、踏んづけでもしたら殺されかねない。パニック映画も殆ど見ているだろうから、この程度の揺れなど平気なのだろう。

夫は半年ほど前から南向きの客間を占領して、勝手に自室に改造して生活している。

大画面のテレビを買い込み、最近はベッドまで運び込んだ。もつとも夫は、随分前からリビングのソファに寝ていたから、朝食の準備をしながら、床に転がり落ちた巨体を見なくて済むのはいいことだ。この前掃除しようと思つたら、いつの間にかドアに鍵が掛かるようになっていた。

小さくノックして、「ねえ、地震じゃないの？ 逃げる準備だけでもしとこうか。どうする？」と言つてみた。耳を澄ましても返事はない。

「ねえ。念のために、ねえ。できれば逃げた方がよくはない？ 叔母さんの家は平屋でしょう？」

反応はなく、何度かノブを回しても開かず、ドアを叩いたら向こう側に何かぶつかる音がした。大方枕でも投げつけたのだろう。

だいぶ落ち着いてきた。来たら来たで仕方がない、という氣になつてきた。取り敢えず着替えを済ませる。

台所の流し台には昨夜の洗^ゆい物が半分残っている。食事の準備までは何とかできるのだが、後片付けが面倒で、昨日もそのまま眠ってしまった。この頃、訳もなく疲れるのだ。

あれこれやっているうちに、先ほどの妄想は消えていた。私の勘違いかもしれないという気さえしてきた。で、簡単な朝食を作った。

出来上がったベーコンエッグとサラダをテーブルに並べていると、夫も息子も丁度いい塩梅で起きてきた。いつもそうだ。餌の匂いで分かるようだ。食べ物で辛うじて繋がっている家族だ。

テレビを付けると「先ほど震度3の地震がありました。津波の心配はありません」とテロップが流れている。ほらやっぱり、と思ったが、夫も息子も画面を見ているはずなのに黙っている。無視しているのか、本当に関心がないのか。で、私も何も言わない。そして何事もなかったかのよう^{よう}に朝食は終わった。普段通りの年の瀬の土曜日の朝だった。

洗^ゆい物をしながら、娘のフミは大丈夫だったかしらと思^{おも}って、ここが揺れたからといって、あそこも揺れたとは思^{おも}わないと思^{おも}い直した。フミの住む京都は九州から随分と

離れている。どうせ電話しても「何が。地震？　ここまで一緒に揺れるはずないじゃん。馬鹿だね」と返ってくるに違^{ちが}いない。

この娘は「馬鹿だね」が口癖だ。相手が与^よし易^よしと見るや、途端にぞんざいな口調になる。この「馬鹿だね」を他人にも使う。兄にも時々言う。夫には陰で言っている。私には頻繁に使う。無^む論^{ろん}いい気はしない。これは、よくない癖だと思^{おも}う。夫とそっくりだ。

以前はそれとなく注意していた。が、逆に私が意見される。それくらい^{くらい}の押し強^{つよ}さみたいなものが社会では必要だ、だからママは駄目^{だめ}なのだ、と言うのだ。それに私は、ちゃんと人を見て使い分けている、のだそうだ。そこが人間としてよくないんじゃないの、と言^いたいところだが、言い返されてますます不愉快になるのが分かっているから、もう言^いいたくない。

フミは今、浪人中だ。恐らく今度か、今年が駄目でも、きつと来年には司法試験に合格し法律家になるだろう。受験勉強は昔から得意だったのだ。でも社会はそんなに甘くはない。あんな調子で法律事務所の経営なんて上手くいくはずがない、と思^{おも}う。きつと痛い目に遭^あうはずだ。そして己の傲慢さを思い知るのだ。かわいそうではあるが、それが社会の厳しさというものだ。

全くどいつもこいつも、と思いながら、ベーコンの焼け焦げをステンレスの東子でごしごし擦ると、鉄のフライパンから真っ黒い汁が流れた。

やはりあれは大地震の前兆だったのだ。ちょうどあれから二週間後、本震が我が家を直撃した。

玄関に飾った正月飾りの生花が萎れ始めた、一月三日の屋下がりのことだった。暮れからフミも帰省して、久しぶりに一家そろって正月を迎えていた。といってもお屠蘇を飲んで、黙ってテレビを見ながらお節を食べ、食べ終わるとそれぞれ自室に引き上げる。全くいつもと変わらない。もともとフミが五月に司法試験を控えていたので、帰るなり、皆を呼んで「絶対音を立てるな」と命令し、私としては食器を洗うのにも気を遣うという風ではあったのだが。昨夜フミが「明日、帰る。夕飯はいらない」と言うので、お昼はステーキを焼いて、ちょっと豪華な食事を出した。私としてはちよつと早めの壮行会のもりだった。

昔は正月というと、初詣、初売りと家族でよく出掛けたものだ。しかし、そんな雰囲気はいつの間にかきれいさっぱり消えていた。「家族にも季節があるのよ。いつまでもいい時期が続くとでも思ってるの。どこも似たようなものよ」と友人は言うが、本当だろうか。いつからこんなに

なってしまったのだろう、などと一人で無音のテレビを見ながら考えていた。フミが帰り支度をしているので、手伝おうかと声を掛けると「いい。かえって迷惑」ときた。全く言いたい放題だ。それにしても、夫も息子も何をしているのだろうか。

そのときチャイムが鳴った。それも立て続けに気忙しく何度も鳴ったので、既にただ事ではない気配が伝わってくる。慌てて玄関のモニターを覗くと、女が立っていた。その後ろに赤ん坊を抱いた中年の女がいて、代わる代わるレンズを覗き込んでいる。中年の方は若い方とよく似ているので、二人は親子だろうか。

「どちら様？」と聞くと、「旦那に用があるんです」とまた気忙しくチャイムを鳴らす。

「ちよつと待つて。呼んできますから」と伝えて、夫の部屋を開けると、夫は寝転がってビデオを見ていた。騒々しい映画をヘッドホンで大音響で観るのが好きなので、こんな時は蹴飛ばしてもしないかぎり、人が来ても気がつかない。煙草の煙が部屋に充満して息が詰まりそうだ。ワタルよりは幾分ましな腹が、笑っているのか小刻みに揺れている。

ヘッドホンを取り上げられ、きょとんとしている夫に私がお客さん。女が赤ん坊を連れて来たわよ」と言うのと、

夫はむくりと起き上がり、無表情のまま何も言わず出て行った。

慌てている様子も隠そうという意図も全く感じられなかった。私は窓を開け放った。よく晴れていて雲一つなく、でも風が少しあった。ベランダに出て部屋を眺めると、冷氣と煙がゆつくりと渦を巻き始めていた。

女はソファに腰掛けて、足を組んでスリッパをゆらゆらさせている。タイトなスカートが裂けそうなほど、むっちりとした立派な太股と脹ら脛だ。夫はあんなのが好みだったのか、と思った。四十前後だろうか、筋肉質の堂々とした体格で背も高い。美しくはないが意志の強さが滲み出た顔だ。一目で敵わないという感じがした。

「これ、この人の子供ですから」と女は、私に向かってゆつくりと言った。そして、赤ん坊を抱いてソファの脇に立っていた女に、終わったら連絡するから、と耳打ちした。ばあやみたいな痩せた女は、赤ん坊を抱いていた腕を、くつと伸ばして前に突きだし、皆に確認させるような仕草をした後、そそくさと出て行った。

赤ん坊は半年前後だろうか、痩せてぼんやりした表情をしていて、男か女かも判然としない。赤ん坊にしては少し顔色が悪いように見えた。

いつの間にかワタルもフミも居間にいて、「わあ、やばい

ね。そっくり」などと囁き合っている。どこが、と思ったが、確かに輪郭と鼻の形が、どことなく夫に似ていなくもなかった。息子も娘も驚くというより、むしろ面白がっている様子だ。女だけがソファに座り、私たちは何故か彼女を取り囲むように立っている。

「こういうことですから。奥様。それにちよつと息子に障害が見つかりまして、とても一人で育てる自信はございません」と女は言った。夫は、そのことは聞かされていたのか、無表情のままだったが、そのときはばかりは大きな体が少し縮んだように見えた。

暫く沈黙があつて、夫は「まあ、そういうことだ。悪いな」と私に向かって言った。夫と子供たちと女の視線が私に一齐に注がれた。奇妙な沈黙が訪れ、それがいつまでも続いた。おろおろとも違う。茫然自失というのとも違う。反応すべき主体である私が存在しない感じなのだ。私の頭は空洞になってしまっていた。でも私が答えなくてはならない場面であることは分かる。他の誰でもなく、私に問われているのだ。こういう場合、妻であるなら、絶叫するなり女に掴みかかるなりすべきなのだ。どうしよう。せめて何か言わなくてはと思うのだが、本当のところ、焦りはあまりないので、何も思い浮かばない。困った、と思ったそのとき、

「ぜんぶ、あなたのせいよ。あなたが愚図愚図だから、私はいつの間にか抜き差しならないことになっちゃったのよ。引き返せないところまで来ちゃったのよ。これからうっと一人で苦労するなんて我慢できない」と殆ど大声で女は言った。女は赤ん坊の件で怒っているようだ。腫れぼったい大きな目が赤く充血して、真一文字に閉じられた唇がひくついている。私は一応妻なのだから、私が被害者なのだから、女の理屈は無茶苦茶なのだが、女の言い分も少し分かるような気がした。

女と夫との仲は七年越しで、そのことを実は私は二年ぐらい前から、薄々気付いてはいたけれど、話し合わなくてはと思いつながら、確かに女の言うように鬱陶しくて、愚図愚図先延ばしにしてしまった。そのうちに、そんな状態にいつの間にか馴れてしまった。抗議したところで、夫から百倍ぐらいの勢いで言い返されるに決まっている、と思った。夫はやり手で弁が立つ。「そんなの止めて下さい」と言っても、最後には「なんで？　なんで止めなくちゃいけないの？　だって愛してるんだもん」などと巫山戯たことを言い出すに決まっている。そして私は何も言い返せず、惨めに黙り込むのだ。きつとそうなるに決まっている。それは、絶対に嫌だった。それより何事もなかったように時間が過ぎてくれれば問題ないと思っていた。だから相手が

どんな女かも調べもしなかったし、女が若いなら、夫は六十近いのだから、すぐに夫が捨てられるだろう。いずれ元に戻るだろう、と思っていた。しかし赤ん坊がいるなんて知らなかった。ここ数カ月、夫の機嫌が悪かったのは、赤ん坊の件で女と揉めていたのだろう。

「どうなんですか？　あなたってそんなことも答えられない人なんですか？」

気がつくくと女が目の前に立っていた。いつの間にか、挑発するような冷やかな視線を変わっている。夫はさすがに当惑したような表情を浮かべ、子供たちはというと、にやにやしながら興味津々、というふうに見えた。私としては、急を要することであることは分かるが、そう思えば思うほど、他人事のように腹も立たないのだからどうしようもない。傍から見たらきよとんとして、馬鹿みたいに見えたことだろう。

「少し考えさせて下さい。だから帰って下さい」とだけ漸く言った。女は「やっぱりね。そうだと思った」と鼻先で笑い、私はその物言いを、よくあるテレビドラマみたいだと思った。女はドアを叩きつけるようにして出て行った。怒ったり見下したり、そのまま顔に出る、分かりやすい人だなと私は感心して見ていた。

玄関を出るとき赤ん坊の泣き声が一瞬間こえたような気

がした。ばあや役の女はドアの向こうで待つていたのだから。何が「やつぱり」で「そうだと思った」の「そう」の自身が、分かるようで分らない。

リビングに戻ると、夫も子供たちも拍子抜けしたような表情を浮かべ、私を見ていたが、やがて私から目を逸らすようにして自室へ引き上げた。私は一人リビングに残された。私には自分の部屋がなく、逃げ込む場所が無かったのだ。

それから一時間ほどして、娘が黙って帰って行った。夕方、夫が出て行く気配がした。そしてその夜、夫は戻らなかつた。

あのとき、実際はもつとずつと深刻で悲惨な遣り取りだつたと思うが、あの女が現れたとき、茶番、という言葉がふつと浮かんだので、私がそんなふうに感じたかつたのかも知れない。そして安っぽいテレビドラマのようにしか思い出せなくなつてしまつた。

私は公立図書館の司書をしている。定年まであと三年。短大を卒業したあと上手い具合に就職できて、現在まで大過なく、少なくとも大きなトラブルは起こさず勤めてきた。

司書は女の子の懂れの仕事らしくて、本好きの女子高生に「どうやったら司書になれますか」などと聞かれたりするけど、今は社会の変化が激しいから、司書もこの先どうなるかしらね、と答える。パートが増えたり、仕事が民間委託になったり、電子書籍に業務のセルフ化、と変化は目まぐるしいが、昔ながらの遣り方で、定年近くまで勤められた私はとてもラッキーだつた。大変な部分もあるにはあるけど、会社勤めの夫や友人を見てみると、とても激務とは言えない。ぼんやりした私にだつて何とかやってこれた。もちろん労働運動なんかを積極的に行つたり、子供向け・大人向けの朗読会などを企画したり、活動的な司書の人も多いけど、私は何もしてこなかつた。

あの事件があつた後、少し寝込んだりしたけど、間もなく仕事が始まつたので、私としては、よかつた。書庫の奥で一人いろんなことを考えた。

あれから一カ月が過ぎた。今日は土曜日なので、恐らく数日間は私一人だ。夫は時々帰ってくる。息子も同じだ。ワタルは恐らく、付き合つている年上の女のところに転がり込んでいるのだろう。あれで結構モテるのだとフミに聞いたことがある。女には馴れ馴れしく口が上手い。血筋だなと思う。

夫も息子も、食事のとき顔を合わせるくらいで、それぞれ自室に引つ込んで何かやつてゐる。もちろん何も話さな

い。食事を作りながら、こんなの変、と感じるけど、殆ど自動的に手が動いている。五十七歳のハナの破綻の人生を、もう一人のハナが他人事のように見ている感じがする。五十七歳のハナは殆ど内面が存在しないかのようになっている。自動操縦の状態なのだ。もっともこれは、今に始まったことではなく、「自分のこと、人ごとみたいに話すのね」と昔からよく人に言われた。そのたびに笑って済ませてきたけど、やはりそれはいけないことだったのだ、などと本当はとつくの昔に気付いていたくせに、こんなことを平気で言ってみたりする。ほんとに私は始末に負えない駄目な奴だと自分でも思う。

簡単な夕食を作ろうと思つて台所に立った。流しの隅に溜まっていた野菜くずの輪郭がぼんやりしていると思つたら、カビが生えているのだった。冬だけと暖房が効いていて、それにこのキッチン嫌になるほど日当たりがよいのだ。

「腐る」

もう一人のハナが五十七歳のハナに囁いた。変な気分だった。そうはつきり言われると、だらしなないハナも流石にたじろいでしまうのだった。

私は台所を見回し、何故か天井を窺い、リビングを眺め、ベランダに出て、部屋の中を眺めた。何故かそうしなけれ

ばならないような気になったのだ。テーブル、食器棚、テレビその他、一通りのものは揃っているけれど、全て空っぽの感じだった。全部一応私が買い揃えた物なのに、私が留まっているものが何一つない。例えば誰かに勝手にソファを取り替えられても、全然平気。要するに私はこの家のことなんて、どうでもいいと感じているのだった。胃の辺りにうっすらと不快感が漂っている。

夫の部屋に入ってみる。あらゆる隙間に趣味の物がぎっしり詰まっていたのに、随分と物が減っていた。煙草の匂いが部屋全体に染み付いているので、少しえずいてしまった。帰ってくるたび、少しずつ何か持ち出しているのは気付いていたが、棚から本やDVD、クリアケースの中のナイフやぐい呑みのコレクション、壁面のプラモデルがあちこち抜き取られている。

息子の部屋は、三方に堆く積み上げられたDVDラックの底の、脂汚れの悪臭漂う万年床が、主が這い出したときそのままに丸い口を開けていた。散乱するDVDはそのままで。

フミの部屋のドアを開けると、机と椅子と電気スタンド、それにベッドがあるだけで、他は何もない。ここももぬけの殻だ。中に入ると、机の真ん中に消しゴムの滓が綺麗な富士山の形にして置いてあった。高さ二センチはあるだろ

うか。昔から本当によく勉強する子だった。大学入試が終
わって家を出るとき、押し入れの中の大量のノートの処分
を頼まれたけど、捨てるに忍びなくて大半を残しておいた
ら「惨めつたらしい」と叱られて、帰省するたび自分で処
分していたみたいだけど、それも空っぽになっていた。全
身から力が抜けていく。

リセットするにはやはり断捨離かな、とぼんやり思った。
でも、もうここには何も残っていないじゃないか。夫や息
子の部屋にしたところで、残っているのはガラクタばかり
なのだから、本来彼らがすべき断捨離後のお片付けを、私
がやってやるようなものではないか。私はそこまでやるの
だろうか。自分が何とか立ち直ろうとしているのは、私に
も分かるが、既に私のエネルギーは枯渇してしまっている
のだから、無理なんじゃないだろうか。

そもそも愛人が乗り込んで来たとき、最初に浮かんと言
葉は「やっぱり！」だった。私はこの事態に立ち至ること
をちゃんと予測していたのだ。だから腹が立たないのは当
然だ。

何しろ私は昔からこうだった。生きていく上でのあらゆる
出来事・雑事に付随する決めごとは、いつも誰かがやっ
てくれた。父が他界した後、結婚する前は気丈な母が。夫

との結婚だって、半分は母が決めたようなものだった。そ
の母が死んだ後は、しっかり者の姉。だから数年前、姉が
死んでしまっただけからは途方に暮れた。か弱い私が高い木
の上から恐る恐る下りようとしているのに、急に梯子を外さ
れた気分だった。姉は夫と娘二人を残して五十七歳で死ぬ
時、「あんた、これからどうするの？」と訊いた。姉の死を
恐れる本当の理由を見透かされたようで、私は赤面した。
「おれ、と」思っただけで少し狼狽うろたえた。でも姉は骨と皮ばかりに
なった手で私の頭を優しく撫なでながら、「がんばれ、がんば
れ」と微笑んだのだった。

以来、立て続けに嫌なことが起こる。姉がやっているの
かも知れないと本気で思ったりもする。でも、こういうこ
とは、できることならもつと早く来て欲しかった、と思う。
私はもう若くない。なまじこれまで、傍から見たら順調
だったせいで、そのことが仇になった。私は守りに徹し
ようと思ったのだ。穏便に、穏便に。我慢して遣り過こし
ていけば、今に何とかなる。でも、何ともならなかった。
結果、見事に全てを失った。今ではそもそも私は何かを
持っていたのだろうか、とすら思う。

隣には老人夫婦が住んでいるから、いつもひっそりして
いる。さつきから物音一つしない。死んでいるんじゃない
かと思うほどだ。彼らに人が訪ねてくるのを殆ど見たこと

がない。通路に出ると時折かちりと鍵の音がするので振り返ると、丸い背が音も無く歩いていたりする。あの姿はまるで、未来の自分の姿を見るようだ。未来？ あなたって本当に自分が見えない人ね。違ふよ。今のお前じゃないか。

愛人の部屋はどんなだろうと想像してみる。ドアを開けると生臭い匂いが部屋に充滿していた。奥の暗がりにも四つん這いになった夫の丸い尻が見える。私に気付くと「見るな。あっちへ行け。お前には関係ないだろうが」と夫は喚き始めた。女の股に頭を突っ込んでいるようだ。鼻先に血が付いている。また子供が生まれるようだ。脇では例の赤ん坊が、火の付いたように泣きだした。また苦勞を背負い込んで、お気の毒にと思うと、少し笑える。息子の部屋には例の年上の女の姿はなく、息子はゴミに埋もれてカップラーメンを啜っていた。息子も私を見ると「えー、来たの。帰ってよ。あいつが戻ってくるからさ、迷惑だよ」と背を向けた。

そうか、船が沈没しそうになったからみんな脱出したのか。私だけがぼんやりして逃げ遅れているのかもしれない。ここは老人ばかりの石棺みたいな場所だから、逃げた先がどんな場所だって、少なくともここよりましということか。そう考えると少し納得できるところがあつて、というより自分を納得させられた気がして、いつの間にか、机に

突っ伏してうたた寝していた。起きると唾液か涙か、小さな水溜まりができていて、その中に富士山がすっかり崩れて散らばり、それが頬にべっとり貼り付いていた。袖口で子供みたいに拭くと、汗がばらばらと床に零れ落ちたが、何、かまうものかと思つた。

黒のマスクに紺緋のトートバッグを持ち、生成りのストールを羽織る。いつもは無視するのに、玄関の姿見に映る自分の姿をまじまじと見た。身長はあるしスリムだし、面長に少し鷲鼻で、化粧をすれば驚くほど華やかな顔になる。自分で言うのもなんだが、殆ど美人といつても差し支えないと思う。でも化粧も白髪染めもずっと前に止めた。面倒になったからだけど、あまりの老け込み方に自分でもびっくりした。ページュや黒を合わせて、アクセサリーをつけていれば、お洒落で目立たなくてよいと思つていたけど、酷い勘違いだった。まるで骨董品の墨絵の掛け軸を見ているようだ。染みだらけなのもそっくりだ。

浅黒いノーマイクの肌、あわてて口紅を引くと、旅人を食らった後の山姥みたになつた。明日、化粧品をもう一度買い揃えようと決心する。

外は冷たかつた。ダウンを取りに戻ろうかと迷つたけど面倒で止めた。見上げると、どの部屋も同じような作りなので、自分の部屋が分からない。ここを購入するとき、私